憂はしげにも飛べる鷗よわが思ひ
波をのりこえ、搖らるゝ空の風に
傾く潮にうちつれてすぢかひに
憂はしげにも空に揚りし白き鷗よ。

太陽に醉ひしれ
のびやかに
宏大の天地を横ざまに飛びゆかむ心、
夏の微風に
紅き波をこえて
靜やかにやはき睡り心地に飛びも行きなば。

さはれまたいと悲しげに彼は啼く、
杳かなる船人ももの怖づごとく、
風のまにまにうちつれて浮きまた沈む。
かくていとも虐げられし翼をば
再び空に、かくてまた悲しげに打ち叫ぶ。

そも何ゆゑぞ
痛めるわが心
不安の翼に狂ほしき帆に海の上をば
吾にはいとも懷しきすべてを
恐ろしき羽を伸して
わが愛は波頭にぞ覆ひぬ、何ゆゑぞ何ゆゑぞ。

IV

惱ましき角の音林にひゞく、
孤兒のごとき悲しさもて。
低き木立を漂泊ふ風につれて
丘の麓にかき消ゆる。

狼の如き心ぞその音の中に獻欷り、
落つる日影にうちつれて立ち上る。
疲るゝごとき苦悶我身を捉へ
かくも苦しめ、傷ましむる。

この嘆きをば鎭めんと
綿のごとくもふりつむ雪
血に染まる落日をおほひぬ。

あな哀れ、秋の嗟嘆ぞ空に充ちぬる、
心つれなき薄暮になにか優しく
靜かなる景色とともに眠るが如し。

VII

あはれ、汝、幸薄き良きおもひよ、

糞ふ希望と徒らに失はれたる優しき心の悲しさと
正しき心もつ胸の快よさ、
その戒しめと穏かなる諭しと――あゝかくも、
わが心は目覺め、素直にありぬるを、なにかたぢろぎ、
くるほしき夢の恐れを生溫き夜の床をば放たれて
なほかつ怖づるこゝろあり。
そは邪惡の思ひありて心ならずもつぎつぎに
限りも知れぬ月光の恐れもつ身となる故か、
檻をいでゆく羊のごとく一つ二つと放たれて
すべてはそこに眼うつむき頭を地にし、
もの疲れせるおもゝちにこそ控へたり。
見よ小羊はその列の長が命ずる手のまゝに

彼停ればかたはらにすべては停る。
彼らの頸をかの肩になに氣なく置き怪まず、
わが小羊よ、この我は君が牧者にあらじかし、
そはなほも卓れし人ぞ、ものゝ理知る人ぞ、
長き年月君を導き、かしこに閉ざし
またま晝にはその手より、君を放ちしその人ぞ。
彼に從へ、かの人の鞭こそ善けれ
かくて我は
汝が疲れて鳴く時にいつも優しく訪づるゝ
彼の聲の下にぞあらむ、汝が道に、いとまめやかの彼が狗兒となりてゐむ。

＊ダンテ（地獄の卷）

VIII

はてしなき小羊の列
いく重にも疊りて
晴れ渡る霧のなか、明るき海は
清き入江にたはむるゝ。

かしこには青樹立また風車
輕やかに軟かき綠の野越え、
踊り狂ひてむつみ合ふ
捷しく若き駒のむれ。

安息日はこゝにあり、
波もみづから戲れつ、
樂しきさまに牝羊も
その白き毛皮のごとく怡しげに。

たちまち響く波の音、
よせまたかへす渦卷よ。
鐘の響きは笛のごとく
乳のいろなす空に漂ふ。

IX

海は美し
御寺よりも、
忠實(まめや)かの乳(め)の人と
聲嗄れし子守唄
あゝ海の上にぞ・
聖母マリアは祈れり。

海はすべてを與ふ
恐怖(おそれ)も優しさをも、

吾はきく宥(ゆるし)の言葉
また怒る呟きを、
その宏き心こそ
つゆほどの痛みもなし。

あゝさだめなき日にさへ
かくも忍びぬ、
親しき風のおとづれにぞ
吾ら汝(な)とともに歌はむ、
『希望(のぞみ)絶えし汝(いまし)よ
苦痛(いたみ)なく死につけ』と。

かくて明るく
ほゝ笑める空のもとに
海は濃碧に薔薇色に、
また灰色にさ綠りに……
すべてに優り美しく、
あゝ吾らより美しく。

X

麥の祭りよ、麵麭の祭りよ、
その收穫の祝をば、昔夢みし戀しき場に
影も紅らみ薫ゆるまで明き光に浴みして

人も自然も皆すべて燒かれ立ちけり。
大鎌の鋭き一削ぎに刈られつる藁の黄金は
うち沈む光の如く一きは光り、また映ゆる、
野はすべてその際涯までと營役に蓋はれぬ。
またたまゆらに人の面に愉しげに、またおごそかにと打ち變る。

すべてのものは喘ぐなり、この日の下には勞役と
動きのほかに何もなし、熟りたる收穫時を靜やかに
心騷がすなほも働く勞役は
酸き葡萄をも太やかに甘くなさしむ。

勞役(いとなび)と古(むか)しながらの日の光り、パンと酒とに

また地の乳に人々を養ふために
笑と僅かながらもすべてを忘るゝ清き醉の
心正しき盃を人に與ふる收穫人(とりいれびと)よおゝ酒造者(さけつくり)よ、きみが時こそ
まことなれ。

パンの花咲く上にこそ酒の花咲く上にこそ、
またすべて與へられたる地の上に人がつくりし果實(このみ)こそ、
收穫(とりいれ)と酒の神こそ、あゝその果に分け與へらる
聖餐式の肉と血とこそまことなれ。

昔と今

序曲（昔）

路に惡き群あり
逃れよ、わが失はれたる兒等、
汝がたゆたふひまに
妖怪（シメエル）はおそひこむ。

のがれよその肩の上によぢて
飛立つ蜂の群の如く、
窓帷（まどかけ）のおぼろに小さき花のなか
病む人の夢のごとくに。

をのゝくわがものおぢしたる掌は
いまもかよわし、さはれ終に
熱にやむことなく
聖（きよ）き力のほかに息づかじ。

わが手こそ君をば祝ふ、
わが暗き日の小さき面被（ムーシュ）に、
またわが白き夜半にぞ
夙（と）く語れ、小さき失意よ。

小さき希望（のぞみ）よ悲みよ、また喜びよ、

神を贖せし昨日の日よ
わが心は昔を思ふ
去れよ忌はしき惱みよ。

詩論

——シャアル、モリースにおくる——

何ものよりもまづ音樂ぞ、
そのためには分ちえ難きものを選ばむ、
いと仄かなる、消なば消ぬがのものをこそ
げにそこには手もて量るも置くこともなしえがたかるものぞあ
れ。

良き言葉をば選むには何氣なくなせ、
言葉をむしろ輕んぜよ、
明るみと暗とのかくも織り交ざる
薄暗き詩よりほかに慕しきはなし。

そは面紗の後ろにかくるゝ美しき瞳なり、
日中にゆらめく太陽の光りなり、
日の光り、和らかき秋の日の虚空のごとくに
また夜に明き星屑の青く輝く光のごとし。

吾ら色彩を求めず、色合を求む。

色合（ニュアンス）げにそのほかになにものもなし、
その色合（ニュアンス）ぞたゞひとり
夢を夢にし笛を角（かく）にと結ばしむる。

劍もて刺すごとき言葉を避けよ、
殘忍なる諧謔と不純なる嘲笑（わらひ）をさけよ、
そは空いろの眼（まなこ）をば泣かしめむ、
またすべて汚き厨（くりや）の韮のごとき匂ひをさけよ。

雄辯を捉へてその頸を捩れよ、
努め歩みて「韻律（ライム）」をば少し賢くなさむとき、
正しき道に還りえむ、もしその理（ことわり）を覺らずば

韻律はいづくに迄か到りえむ？

あゝ誰か韻律の誤謬（あやまり）を語りえし、
いかなる痴兒（たはけ）かいかなる愚かの黑奴かありて
鑢（やすり）の下にかくも空虛（うつろ）の僞り多き
安價の寶玉（たま）をば贋造せしや。

げに音樂ぞ昔も今もこのゝちも
汝（な）が詩（うた）を飛びゆくものとならしめむ、
靈（たましひ）をこの世の他（ほか）の天界に、この世にあらぬ他の戀に
消え入るごとく思はしめむ。

汝が詩をして占ひの言葉たらしめよ、
身を引き緊むる朝風にかくも亂れて
薄荷の花と麝香の花の咲くごとく……
かくて余はすべて文獻のみ。

衰頽

——ジョルジュ、クウルトリーヌにおくる——

吾はデカダンス末期の王
日の光衰へて舞ふところ金の調の
くづをれし頭韻を織り成せる
不法の章句を許容すものなり。

ふかき倦怠の心にたゞひとり惡を持つ靈。
かしこには血を流す長き間の戰鬪あり、
かしこに覓むる勿れ、たゞ緩かに弱くあれ、
暫くも、この生を飾らんと思ふ勿れ。

あゝ彼處に求む勿れ、また死をば願ふ勿れ
あゝ心ゆくまで飲み干しぬ、バチルよ君の笑ひの種もつきしや
あゝ心ゆくまで飲み干しぬ。食ひ果しぬ。もはや語らむ言葉なし。

たゞ人には火に投げ入られむすこし變りし詩のあるのみ、
たゞ君を等閑にする少し早き走者あるのみ

たゞ君を惱ますことを知らざる倦怠のあるのみ。

序曲（今）

そはなべて仄暗し、
夜の果の夢のごとし、
あゝ眞實よ君のみぞ
夜明けに光るひとつの光り。

忌はしき暗のなかにしかくも蒼ざめ
たまゆらも安すなし
きみのみぞ恐怖にゆらぐ

小枝の下の月のひかり。

またいつか象をなして
うつくしき裝のなかに
あらゆるものゝ歌と溶けゆく
鬱憂の幻よ——

日の光と自然の美しき裝のなかに
碧空のたゆしきなべにのぼりゆく
心も清き讃領歌のうつら心地に
人にも神の心にもかくは優しく。

愛

朝の祈禱

あゝ主よ、わが祈禱をばきゝとめ記し給へ、
爾智慧のみなもと全き善の神、
また絶えずわが死のときに心配らす爾よ、
永遠の心もて吾を愛する爾よ、

この畏れある幸福は慈悲に充ちたる不可思議なれば
いく度か心ひそめて思ひ廻せど
いつもわが理智の心は思ひ惱めり——
さればこそ爾永遠の心もて我を愛するなれ。

然なり爾がいと大いなる懸念は
わが死の時に就いてなり、爾が望むものは幸福と
またそをば世界の前に光明の前に與へむため
爾はすべてを備ふるなり、この大なる懸念にと。

限りなき報謝の念といとも貧しき祈願もて
身をば固めしわが祈禱をばきゝたまへ、
戀人の詩に斧鑿加ふる詩人のごとく、
髮の上に嬰兒を接吻くる母のごとくに。

願はくば爾が歡ぶことを吾に授けよ、

また爾が歡ばんためには始めより
苦痛のなかに、嚴しき法の下にある正しき人のなかに
吾をして歡びに充たしめよ、吾もはや嘆かず爾が御天に近づき
えん。

爾永遠の父のみもとに近く永遠の歡喜のなかに、
聖徒らに耀き充つるそのなかに吾恍惚と、
あゝ吾にあたへよ、いと强き信仰を
吾爾が計畫にかなふ百の死にも耐へ忍ばむ。

また吾に與へよ、いとも優しき信仰を、
吾わがためには正しく聖き憎惡さへも拋たむ。

吾わが罪を憎めばぞかの漁夫を愛するなれ、
吾やがてかの信無き人をも愛しえむ。

また吾にあたへよ、謙虛りたる信仰を、
諸々の惡念に心惱ます不善のうへに
恩寵を思はざる心の上に、またわが失はるゝ勞力に
かき撒らさるゝ倦怠の時の上にも吾は嘆かむ。

爾が聖靈ぞわが愼みふかき熱心と、
わが賢き熱情にとりもどす、その情緒をば知れるゆゑ、
正義の神よ願はくば信ふかき心もて
吾にあたへよ、爾が下僕を疑へる大御心を。

吾いつまでか懲罰の掟のもとに
信深き行ひと正しき條文のなかにありえむ、
吾に敎へよ、その眞の響きを、眞の律を、
また誘惑の危機を、唯一の道を敎へよ、願はくばわが周圍をば
守りたまへ。

爾を知るに到らむその道を示したまへ、
世の愚かしき痴人に爾が望む道をば敎へ給へ、
父もなく、また師も有たぬ爾が嬰兒にぞ、
吾善根を有たむにはすべての榮光ぞ爾に到らむ。

かくていつか求むるものゝすべての
人、忍辱またこゝに記されし本務の法の
爾が戒めのなかにありて吾が至上の心の實を結ぶとき、
吾をしてあらゆる惠みある愛に浴さしめよ。

あらゆる吾が弱さを、あゝその死に至るまで
汝が全き心もてその愛に浴さしめよ、
ありとある感覺とあらゆる陶醉の死に到るまで、
心と機能とまた情慾の死に至るまで。

あはれ清き人生の道へと永遠の善へと、
長き年月吾に呼ばはり導きし爾が意氣に背きて

かくも忘けしわが靈の死にいたるまで、
さはれ彼には地獄の夢ぞ守られむ。

重き修辭のために醒されしその大きなる夢のうへに
意想を凝らし詩格の律を無視しつゝ
血に充ちし詩句を意味なく引きのばす
あゝわが心と胸とわが感覺を亡せよ。

見、信じ、感ずることを靈もてせよ、
神にあるものゝほかすべて僞りのみ。
靈もて在らしめよ、主よ、爾が眼界のなかに進み入り、
その空のほかに顧はじ、たゞひとつの希望、たゞひとつの國に

あれば。

この靈をしていとも優しき僕人たらしめよ、
その王座には等しく就けぬ身にしあれば
太陽の光りを浴ぶる小鳥らの苔むす寢床の如き
その祈禱の言葉を彼にあたへよ。

恐ろしき午後の光りにうたるゝ時、
影も斑の片隅に靑草を食み飛びまはる
かの小羊のいとも涼しき小舍の如き平和に充ちし祈禱の言葉を
或は又大月の秣草にすだく蟲の如き祈禱の言葉を彼に與へよ。

爾のもとに善き祈禱の言葉を、群集のなかにありて際立つ言葉を、
市巷の騒擾と昏迷のなかにありて卓れし言葉を、
あゝいつも厳しき誠實に心澄みて
こだはりもなく緩く流るゝ小川の如き祈禱の言葉を彼に與へよ。

死と、黒き罪と、白き悔悟と
失はれゆく機會と埋むるゝ愛と
彼にあたへよ願はくば彼を高むる苦しく強き川波の
高く波うつ響もつ祈禱の言葉を。

靈の禁慾と願望の火の苦悶と、
また嗟嘆の瀧なすくるしみと、

いつまでも完からざるこゝろに
たゞひとり悲嘆を増す愛の孤獨を感ぜむ。

重き腕にうち闘ぐ激き流を横ぎれば
立ち煙る砂の瀧卷、かくも渇きて
空は鉛を溶かせし如く、いつも打ち變る水のさなかに
おし鎭まりがたき渇きは湧く。

さはれ、この水ぞかぎりなき生命に向ひ噴き出づる、
その波ぞやがてしづかに忍辱の心と
爾が眞心こめし愛の足もとに
わが眞心の愛をばうつし出さむ、おゝ寛仁の神よ。

爾の身をば死なしめしその善き死こそ
爾が永遠の心に吾をば蘇らす、
わが虚弱(かよわ)き心を憐みたまへ、わが戰ひをたすけたまへ、
かくてわが弱き心を喜(よ)みしたまへ。

憐れを垂れ給へ、慈悲深き神よ、かのカルバリの
惱み贖ふ靈を救ふため、わが憧がる、
爾が胸の製作を完ふせんため吾を助けよ、
父よ願はくば爾が嬰兒(なきがら)の賜(たまもの)を思ひ玉へ。

わが尋ねしは……

わが尋ねしは小きもの蔭、小き巣のなか
わが守らるゝふかき希望(のぞみ)は聖なる神なり。
わが過ぎし日の過失(あやまち)は心の清き文字板(カドラン)に
のこる隈なくぬぐはれぬ。

吾をば圍み爾(なんぢ)に至る無我と素朴と
わが胸は耶蘇(イエス)の見ませば何か足らざる?
わが貧しさわが淋しさ、固き惱みと荒き寢床と
あゝ何たる慈悲(いつくしみ)ぞ何たる歡喜ぞ。

明るくなりし胸に愛の心ぞ、献身の心ぞ、
あらゆる怨嗟(ねたみ)に安んじえざる

わが生命の惱みにかくも靜かに
かく新しき終局をあたへぬ。

主よ、吾感謝す、これ良き死ならずや、
わが力强き忍耐と戰鬪とを愛したまへ、
われに屬けるものと、吾と、あゝ貧しき瞳によりて
吾ら眺むる空に、主よ吾爾が歡喜のなかに入りえむ。

ヴヰクトル・ユーゴーにおくる

——『智慧』にそへて——

あなたの光榮を讃頌する力においては

今のあなたの追從者の何人にも私は劣るまい。
あなたの名聲は勝利者の如くわたしを醉はす。
あなたの製作は限りない愛をもつて私は愛する。

かくて「眞實」こそ私を素裸にして世界に投げ出した、
わたしは神を愛し、敎會を愛する、そしてわたしの生は
あなたの所有してゐる一切を信じます、
あゝ、惡むべきはあなたの詩を嘲笑ふ反逆者。

わたしは變りました、あなたのやうに。けれども全く別なやり
方で。
わたしのもつてゐるものはどく小いものだが、

しかもまた一つの革命を呼びおこす正義だ、善だ、至上のもの
だ。

あゝ、わたしは賞讃の言葉を知つてゐる、おゝ師よ、わたしは
あなたが昔ながらの狂信をのぞんでゐることを知つてゐる。
こゝに自由な、實に充實したそのものがあります、
あなたは私を苦しみの時にも優しくしてくださつたゆゑに。

風景

わたしの父の國にはかずかぎりない森がある、
そこには狼が住み、もの蔭にはときをりその眼が光り、

緑の樅の根には黑いミルチルが植はつてゐる。
さうしてその森の木ぶかい奥には沼がかり、
堪へがたい木の匂ひを吹きおくる北風に池水は
さゞ波をたてながら清い鑛泉のやうに溢れてゐる。
青い石板で葺いた屋根の村の周圍には
村びとの培ふ畑と牧場とがある。
居るには强すぎるやうな
肉づきのよい家畜はむれ
そして人々は信神に篤く怡しげに暮してゐる、
またわたしの母の國は野の王のやうに
愉快で、生々とした頑丈な人々がたくさんゐる土地、
收穫を充たすためには苦しい仕事を働いてゐる、

そして樹にはきれいな花がさき、水は土地を濕(うるほ)してゐる、
たゞ工場がその醇朴な國の景色をきずつけ、その人の多い田舍(ゐなか)
を汚し、
その豐醇な土地を荒しはするけれど
ひとびとはみんなその土地にゐのこり幸福に暮らしてゐる。
暑くも寒くも、ひとびとは心にたゞ神を信じてゐる。
そしてあのゴシックの鐘樓は天に聳えて高く、
その塔の尖端は狂ほしいばかりその國中を見下ろす高さに達し、
希求と過ぎこし正義の力を語つてゐる。
そしてその塔のまはりにはフランドルの大きな獅子像が
『すべてを力行せよ』と新しい歌を叫んでゐるやうだ。

わたしの夢にある國はそのやうに
二つながらたのしい景色をしてゐる、そこでは
いかなはげしい惱みもあの畑や野の仕事のなかに忘れられる。
戀も遊蕩もみんな精力に充ち、おだやかで自然の制裁と要求と
が平均してゐる、
處女はみんな道義に反いた冒險にはつゝましく、
もしそれを冒した女は先づ何よりも
それらの罪を犯すに至らしめたのらくら暮しを止めさせる風習
をもつてゐる。
そのやうにわたしの國ではすべての人々が滿足し
また滿足してゐたとしても胸に頭のなかに
嵐はやつてきた、なんといふ嵐だ?

ふとしもおそひ來た霰と炎、
貧窮と、神に見はなされた心。
死は乾からびた罪の肉體にまとひ、
かよわい小羊は牧場の草に阻まれ、
青春は疲れて死に、見知らぬ命運はいづこからか襲ふ。
素枯れゆく野に、人氣ない土に、
しぶき鳴る海のどよめきのごとく、
綠ふかい樹から小鳥は飛び立ち、
巢をすてゝ、愛の亡骸をのこす。
たのしい相愛の戀、睦まじい二人暮らしの戀、
それはわたしの身にとつてもはや大した問題でないのだ、
たゞあの鎖樓のなかにいつもかゞやき、

いつも優しい響きを立てるあの懷しい教會の十字架、
唯一の希望と隱れ家の祝福されし標號、
嵐のあとの空にかゝる虹の色こそわたしのゝぞむ愛だ。

×

……あゝわたしはよくも惱んだ、
追はれ追はれて休むところもなく、
隱れるところもなく、歩く力もない
狼のやうに狩り出され追ひ込められたのだ。
そして心機一轉してこゝに
小羊のやうな善良なものとなつた。

憎悪と、怨嗟と、黄金と
鋭敏に嗅ぎまはる馬鹿な探偵とは
わたしを圍み、わたしをとり捲いた、
あゝ幾日も、幾月も、幾年も
私をとり捲いたその惱み！　戰慄の御馳走、
恐怖のスウプ、苦惱の食事！

けれども「自然」といふ森の恐ろしい奥に
運命の獵犬はもうやつてきた、
死――！あゝ何といふ獸、何といふ猛獸！
――もうその「死」は半分以上、その前足を

わたしの上に置き、爭ふ餘地もなく
この胸を咬みつくさうとしてゐる！

たゞ私は血まみれになつて横はつてゐる、
恐ろしい早瀨の方へ血の滲む足を曳きずりながら。
その早瀨は清いわたしの森を横ぎつて流れる！
せめて安らかに死なしめよ、なんぢ、狼、
善き心をもつてするわが友ら、また
わが妹、わが戀人、やつれたる女たちよ。

×

おゝ、つゝましく悧巧な愛人！　おとなしい顔をした敵、
おまへの勝ち誇つた心をすこしも吹聽するな、
傷いたものを殺し、奪掠したものを更に奪ひ
そしてはるかに鐵火をあびせかけることをやめよ、
もういまでは善いことも、優しい甘いこともすこしはわかる、
ひまな時に爐へ火を焚くやうな樂しさも。
おまへはたのしませ、眠らせ、時としては死の靈をもつて優し
い臨終の夢を見せる！
おゝ、愛人よ、離れてくれるな、こゝに居る私をうけ入れよ。
いやな悲しい顔をしてくれるな。
もう二度とさびしい悔恨の辱めをあたへてくれるな。
けれども生きる影もなくてそのうへに悲しむ心さへないといふ

なら
もうそれは最後のおわかれだ。
不幸な人間の世のなんといふ痛ましい土に根づいた運命の樹で
あらうぞ、
エデンの昔からこの煩悶の日に至るまで。

×

わたしは愛に熱狂したのだ。かくも弱いわたしの心は狂つてゐ
るのだ。
いかなる時にも、いかなるものにも、またいかなる處にも。
美と、道義と、勇氣の光りかゞやく處に、

みづから沈み、飛び、また投げ出し、
みづからのこのむものを、追ひ求めるあらゆるものを
いくたびとなく抱きしめした。そのはげしい情感の日。
そして夢がその翼をとりまいてくれたとき、
悲しみと孤獨はふたゝびかへった。今度は親しく。
そして自らの血と肉を反くがまゝにまかせた。けれども、
もう二度と自分の倦怠のなかに死なうとは思はぬ、
いち夙くシメエルの島にゆく船に積荷し、
みづからの味ふ苦い涙よりもたらさず、
東の間の恐ろしい絶望よりほかにもたらさず、
かくてまたふたゝび船をかへして歸つてきたのだ。
果斷と我執とで「無限」の中へ突き行かうとしたその歩み、

しつこい航海者、その行きつく岸にまでまつ直ぐに行つたもの、
いまではその船を危くする眼近な暗礁のおそれもない、
けれども彼は暗礁を踏板とし、拔手を切つて岸に泳ぎついたの
だ。
その男こそこゝにゐる、不思議と云へばその航海の熱望のなか
つたことだ、
朝から暮まで、暮から朝にいたるまで
そして廻り廻る船路はいつもその岬、
見出すものは何もない！　樹もなく草もなく、
飢ゑても渇いても飲むに水さへない、眼に燃えるはたゞ太陽の
光りばかり、
そこには人間の足跡もなく、心もない！

彼自らの足跡さへ――彼の影さへ見當らぬ――
人間らしい心や、生々した心や、はつきりした心は
もう、狂ほしくなり、もの倦くなり、そこに心はなくなる！
そこで勇氣を失くさないやうにと
熱情をもつて支へ、愛をもつて勵まし
港の上に檣の尖をあらはす船のやうに現はれることを希つた。
そしてそのうへに自らを任ずことを――
一日自分の見出したものは異教の使徒。
死か、然らざれば死よりも恐ろしき或るもの！
あゝ死！　死！　けれども自分はその死よりももつと恐ろしい
死を知つてゐる、
いつもものに感じやすい心をもつて

墓場のなかに生き、優しい悲しみを吸つてばかり生きるのだ、
小鳥のやうに苦むした巣を愛してゐるのだ、
自分の耳に親しいものはたゞその追憶ばかり、
自分はその追憶を夢みたり、眺めたり、嬉しく思つたり、厭に
感じたり、
また恐ろしいあの事件をおもひだしたりしながら悲しんでゐる。
私は愛に熱狂したのだ。そして何をしでかしたか？
あゝ、なすに任せてきたわたしの過去よ！

×

森の精は眠つてゐた、サンドリヨン姫は夢を見てゐた、

そこで青髯の夫人は？　夫人はその兄弟を待つてゐた、
して、また、あの少さいプセーは、いやな面がまへの人食鬼から
ら離れて
お祈りの歌を唄ひながら草のうへに臥てゐた。

駒鳥はかるい空氣のなかを飛びまはり、
そここゝにあるかず〳〵の少さな蔭森に
種播く人や草刈る人や、野に出て働く人を
しづかに影につゝむ木の葉とたはむれてゐる。

野にさく花、かず〳〵の野に咲く花は
人が木をめぐらしてこしらへた花園よりも美しい。

その匂ひとかをりはひとに——人間の花に——
藁のかなにある立派な織物のやうに漂ふ。

その虚飾のない香り、風はみだらな香ひを吹きちらし、
嵐はその香をうすらげ、かくて
白晝はもう暮れやうとしてゐる、そして
野の人のやうな純朴な心は私に「死ぬか、生存へるか」とたづ
ねる！

麥はまだ青いが、燕麥はもう黄金に實り
燕はそのおだやかな波のうへを啄み飛ぶ、
畝の方にはたくさんな小鳥の聲がきこえ

樂の音もかなはぬほどの優しい唄を歌つてゐる……

無我な心はかへる。人は巣にかへる――きけよ！――
わたしの傍にはあの蟋蟀が鳴いてゐることを、
吾らはまよはされ、疲れはて、やがては
身をよこたへてさゝやかなスープを啜る、その終の宿へときた
のだ！

薄暮のおもひ

エルネストレノオにおくる

素枯れた草に臥し、漂泊の寒さを味ひ、

霰の銀にふりかゝる水松と松の下にさ迷ひ、
夢みるひとの如く北國の恐ろしい景色のなかに臥てゐた、
かしこを物語めく牧人は羊を追ひあるき、
碧の瞳をした白髪のバルバアルはもの怖ぢしつゝ歩む。
あの「愛」の詩人、もの優しいオヴイードは
ひたすらに眼をかゞやかしかなたを見張り、
悲しみに閉ざゝれた海をみつめて嘆く。

髪はみだれ、灰いろにかゞやき、
苦惱の嵐は額のうへに皺を刻む、
破れた衣ものに肌は寒さの襲ふにまかし、
痛みに引きつる眉毛のしたには

うつむき勝ちに曇つた瞳がかゝる、
むしやくしやした口髭は殆んど白髪だらけになり、
死の贖ひをせねばならぬ證人どもはみんな、
あまりにすさみ果てた愛の痛ましい物語りをばかたるばかり。
苦い怨嗟と、恐怖と、帝王の責とを語るばかり。
惱めるオヴイードは羅馬のことを考へ、
また羅馬に於て輝いた夢のやうな
その榮譽をばおもひ見た。

あゝ、イエスよ！　おんみはこの吾をまつたくわからなくなさ
　ります、
けれどもわたしはオヴイードではなかつた、

すくなくともわたしはやはり私であつた。

ひとりものゝ言葉

わたしは海の上にあるものかげを見る、
どんな海に？　わたしの涙の海に。
わたしの眼は苦ひ風に濡れ、
暗と恐怖のこの夜半に
海の上なる二つの星のやうに輝く。

そのもの影はまだ若いひとりの女と
もう年の行つたその兒どもと。

櫂もなく、帆もない小舟のなかに。
その小舟はひた走る……兒どもと、その女をのせて。

暴風雨(あらし)のなかをひた走る！
兒どもは母にしがみつく、
けれどもどこを走るか知らず、
どこにゐるか知らず、たゞなにも知らず
走ることに希望(のぞみ)をまかせて、狂ほしく嵐のなかをゆく！

なにも知らぬ愚かのものよ、兒どもよ、
たゞ神をたのめ、おまへの父を信ぜよ、
嵐がおまへをうち碎かうとも、

この高見にあるわたしの心は
おまへに豫言する、その嵐は止むことを！　おゝ憐れなもの
よ！

その海のうへには大ぜい人のゐる國がある
善い涙の海のうへに！
わたしの眼はその晴れた室のなかにたのしくかゞやく。
その夜にはもう恐れもなく
その海のうへには二人の良い天使がゐるのだ。

むかし語り

ジ・カ・ユイスマンにおくる

燃えたつ焔のうへに沈香をふり撒くやうに
祖國のために血を流す兵士のやうに
たゞ聖母マリアへの美しい祈禱の歌のなかに
わたしは私の靈とゝもに、この心をそなへようとおもひます。

けれども、あゝけれども、私はあまりに價なき憐れな漁夫、
わたしの聲は正義の聲の胸のなかに吠えたけり、
なほも地の葡萄の苦い酒の香に醉ひ痴れ
神の耳には汚れたる響をつたへてをります。

岩から迸る清水のやうな清い心をもちたい、
われらの表徴である麻の衣をきたあの小兒のやうでありたい、

ひとが近づいても怖れずに啼く小羊のやうでありたい、
燃える王冠を頭にいたゞく「無我」そのものでありたい。

おゝ聖母、おゝ汚れなきマリア、
あなたの讃頌を心からとなへられるものとなりたい、
あなたはこの清められた吾らの地上に足をおき
天使の翼の羽ばたきを透して輝く。

平等無私な心靈を、その心に到ることを、
つとめきゝたく思ふ私は少しばかりあなたを解するにいたるで
せう。
あなたの優しい光榮にかゞやく寛仁な、しとやかなお貌は

わたしを小兒(こども)らしい「無我」の羊小舍(ひつじごや)にかへします。

無我、おゝ何も知らざる美しさ、
靈(たましひ)の聖い火で清められた心の清水、
まばたく眸の上の優しい瞼(まぶた)、
妻戀ふ牡鹿のたへがたい啼き聲！

わが身はあらゆる最後の力のなかに焦れし戀びと、
その肉體の汚れも清きも共に知つてをります、
肉につけるものゝ醜い奥ぞこの祕密も、胸に狂ふ血潮も
その燈明(とうみやう)に供へまつる紅い燭の火も知つてをります。

わが身は神を信ぜぬもの、理論をのみ推しすゝめて
その冗辯をいやしみしものかくてまた
昔の罪をおもひでゝは惱む刑餘の人のごとく
異教徒の放埒をば愛せしもの。

また野蠻なるもの、巷に醉ひどれしもの、
思ひはたさず身を傷つけしひとりの男、
最初の愛を失ひてとりかへしえぬもの、
しかしいまその誤りを償はうともおもひませぬ。

あゝ、なんといふ災(わざは)ひか、この身は
ひとりのさもしい都のひと、

いくたびか見も知らぬ愚かな罪の淵瀬に私を
導いたいやしい男らよ、無頼の徒よ。

劇場や店舗にゐるものはみんな惡い心をしてゐる、
むれ臭いにほひといやな香りとに充ちてゐる、
そして野蠻な心をもつて人に强ひる、
街の歩道のごろつき、とるに足らぬ奴ら！

それらのものに導かれて私はいやしい時代の心に惑溺しました。
（たゞ麥酒を飲むことよりほかに知らず）
その愚かしい不安な頭のうへに
風にゆられる弱い心が嘆いてゐました。

けれども、やがて私に信仰はかへりました、
その心の隅にも正しさを願ふおもひはありました。
そのおもひはやがてむかしの記憶をたどり、
耶蘇の愛する小さな嬰兒となりました。

それはつかのまの出來心ではなく、
眞實にわが頭の中なる神の座に
かの清い御名、聖母マリアの御名とあなたの稱號をば
せめて教會を飾る似而非牧師の僻にならつて飾りませう。
いろいろの惡業や罪禍や數へつくせぬものがありはすれど、

まるでもとから清い身であつたかのやうに
この男はごく單純に神を罵る世界の人々と
今のわが身の清純とを比べようといたします。

この愚かな行ひをする大きな罪人は
いつもあまりに下手なやり方をしてはゐませんでせうか、
裁判するものはいつも眼を見張つてゐるのに——
いつも狹い苦しい牢のなかにばかりゐたではなかつたでせうか。

あゝその室房、修道者の室房、人間の牢獄！
あなたの暗い恐怖と僞善をお隱しなさい、
彼は期待し、彼は休息をあたへられた。

そは何の祕密によつて？　おゝマリア、それはあなたの永遠の
心によつて。

かくてはわが身は御子に近づき御母に近づく。
あゝ何といふ幸福であらう、もはや彼處に！
あゝ何といふ嬉しい涙が、喜悅が！　おゝマリア、
あなたを祝禱するために信者らは
また速かに彼處にゆくためこゝをはなれませう。

この卑しい自尊の心と惡むべき智識とから、
人が精神と呼び、科學と名づけるものから、
そしてあらゆる嘲笑から、自ら辱める笑ひから

信仰をもたぬ聖書の傍註者から、みんなはなれませう。

かくてかしこに跪き、いとも肅しい心をもつて、
燃ゆる念珠の玉をば氣高い指のなかに爪ぐり、
祈願をかけませう、聖母に、聖徒に、法王に、
この憐れな罪の肉體から離れる願ひをば。

おゝ、あらゆる世のことから放れ、何も知らず、
たゞひたすらに計りがたき不可思議の『智慧』に
この身一切を憧れまかし、そのふかい法悅のなかに、
耶蘇の胸を愛し、彌撒のなかであなたをば思ひみませう。

おゝ、かやうにいたしませう。このやうな優しさとこのやうな
心で、
おゝ、聖母マリア、汚れなき處女マリア、
あの「嫁ぎの唄」の白銀の清き歌のなかに
この慰藉ある地の上にあなたの足をば置いて下さい。

ブウルヌムウト

——フランシス・ポアクトヴンにおくる——

岸まで伸びひろがつた樅の長い林、
桂樹と松と樅の入り交つた狹い並木、
そこに村にとりかこまれた市がある。

ところどころには瑞西風の山莊の屋根が木の間に赤く
浴槽のある白い莊園がたくさん見える。

その暗い森は灌木の丘から下につゞく、
見よ、そこから谷になり、またそれから綠と黑の丘となり、
そしてその終りは墓場の暗い眠りを漉かし彩る
光りのさし入る草叢につらなり、
遠く弱い調子にだんだんと丘が重る。

その左手には重々しい塔がある(矢のやうな尖が見える)
こゝからは、ずつと遠くまで續いてゐる木柵のために
よくはわからぬが敎會のやうにおもはれる。

その塔は高く、さみしく、しかし嚴めしく
英吉利の敎會のやうな形をして
空しい天の方にその胸をはり上げてゐる。

わたしがそこを訪れた時は實に好ましい景色であつた。
霧がかゝつてるでもなく、日がさしてるでもなく！　たゞ太陽
は空にあることがわかるだけ、
やがて曇りが晴れると美しい空ははつきり表はれ、
薔薇色に乳色に躍るやうに、空氣は一面眞珠の光りに包まれ、海
は金茶に光る。

その英吉利風の塔からは鐘の音が響き出す、

一つ、二つ、三つ、四つと八つまて、
その優しげな諧音は近づいては消えまた近づく。
その聲の中には火や黄金や銅の音色(ねいろ)がし、優しさと喜びとが告
げ渡る。

その長い森に鳴りわたる大きな、しかしやさしい響き！
いかなる音樂よりもずつと美妙にその音は
歌ひ身顫ふ海の上をしづかにやつてくる、
戰ひのもの音(おと)をきゝつけて勇む歩哨の
路踏み鳴らす足音のごとく。

その鐘(かね)の音が止むと、その大きな咽(むせ)び泣きのなかゝら、

眞赤な一すぢの光りは息づき、海の上にかゝる、
新しい年の落日の冷い光りはかしこに
落ちてくる夜の光りにつゝまれる市(まち)を
血の色に染め上げ、まだ明るい西の方に息づく、
薄暮(たそがれ)はしだいに深くなり、風は冷くなる、
木柵は戰き、よせまた返す波は林のなかに反響(こだま)して泣く、
そして瀧なす響きは重たげに磯に碎けちる、
あだかもわたしの昔の罪を迫(せ)めつける
厭な倦怠のやうな荒々しい響きをもつて。

×

靈の空虚のなかにある胸の寂しさ、
海と冬の嵐とのたゝかひ、
空しい倨傲、嗄がれ聲と誹謗の言葉、
厭はしい隱謀の這ひめぐるこの夜
うかゞひ知る身の終り、地獄の前兆！……

笛の音を三たび鳴らすやうなその鐘の三つの顫へ、
いまも鳴るその三つの響き、あゝ忘れてゐたあの祈りの鐘の聲、
いま思ひ起すそのアンジエルス、その鐘の響きはいふ、――『平
和は戰ひのなかにある』と。
その言葉はおまへの過ぎし日の過ちをとりもどすための敎へ、

清淨な言葉、ひらかれたる世界！

かく、神はその聲のなかに語りたまふ、
森の堤のうへ、右の方に建てられたあの敎會の中より、
おゝ羅馬、おゝ聖母！　吾らを呼びたまふその叫び、
たえずたゞひとつの幸福を叫び、反き悲しむ胸のなか
に十字架のやさしい敎へをばあたへるその言葉よ。

×

――夜はまるで天鵞絨のやうだ。木柵はさゞめく水の音の
うつりかはる響きのなかに沈默してゐる。

まつ直ぐにつゞいた一つの路はこの沈默した長い林の下の
かぎりない闇のなかにおしよせ、
わたしの孤獨の心をぢつと守つてくれるやうだ。

千八百七十七年一月

かしこ

——エミール、ル、ブルンにおくる——

ロンドンの薄暮のなかにかゞやいてゐる一隅の「アンジエルス」
霧と群集の喧噪の燃えかゞやくなかにある「アンジエルス」
固い希望の心をおこさすやうにその響きは
わたしに附き纏ふ追憶とわたしの心のまはりに

赤く燃えたち、また暗く閉ざす悲しみをはげしく捲き起す。
たくさんの家並、歌の聲、ラム酒の味のやうに
引いてはまたさしくる薄い霧のなかに往き交ふ
辻馬車の輙のとゞろき、不安げなひゞき、
そのなかにつゝましく敬虔の響をもたらす鐘の聲
霧と夜の闇の深みゆく時のなかに。

あゝ「アンジエルス」今はすでに日くれ、太陽は死し、潮はすべて乾いてゐる。
汝の路にわが古い罪惡はながい間徘徊うてゐたのだ。
それがにはかに心改め、顏を赧めた、憐れな人間！

汝の心正しい怡びに眞實に祈るやうに全く變つた。
巴里から全く反對のところへやつてきたのだ！

不可思議な無我の心はかくも自らたのしみ、
目に見えぬわづかの所得を贏ちえただけだ。——
重たい沈默の苦い脣をなほもさしのばし、
惡と憎みの冷笑をたのしむ心のなかの怪物から。

罪人にも惠まれたこの洗禮の無我の心、
不意に吾をおそひ、不用意に襲つたこの心は
明るい、新しい微笑をもつてその罪をいやしみ、
恍惚とした懺悔の賜物をもつて

みづからの脣のうへにそなへる。

これぞ吾らにさししめす神の優しい心。
おゝ昔ながらの單純な心。いまもある神のみ心。
いとも敬虔な報償、天の黄金の木の實の
たわゝなる實りの時にかへりゆく心、
あゝ、アンジエルス！「還れ」といふ聲！ 鵠の如く靜かに清
き響きに。

X夫人におくる……

——或るおもひをかきおくる——

あなたがわたしを愛してゐた時に（ほんとでせうか？）
あなたはわたしにおくられた、さはやかにひらいた。
なつかしい、小さな薔薇の花を。
それは清い心の標徴。純潔な心の消息。

その花は花言葉で云ふには
『はつ戀の誓』と。それは
あなたの心をわたしにつたへる
世間並の習慣、ありきたりの仕方。

それから三年がすぎた。二人に！
けれどもわたしはあなたの薔薇のことをおもひでて

その思ひ出にまもられてゐた、そして
それはいつもあなたを思ひ出す悦びであつた。

あゝ！　しかしわたしがその思ひ出にふけるとき、
わたしにはその花のことよりない、あなたの心はない！
うつりゆく季節の風にちるその花よりほかにない、
その心は？　しかしいま、わたしはそれを考へてゐる。

その心はわたしのものにならなかつたらうか、二人の間で？
わたしはその幸福に胸を打つ、
それはいつも單純だ、わたしの傍にある
一つのしるしだ。語れよ、あなたののぞむことを。

わたしはあなたにおくり返しませう、
この悲しい花束を、けれども今は
こんなに眞黑になつて終つたではないか、
もうそれは喜びの色をしてゐない。

しかし、その花はわたしの心の色だ、
わたしはそれを正しい悲しみのかはりに
大股に歩き過ぎる町の甃石の
割れ目のなかゝら摘みとつた。

そのほかにまだ何か證據が要るといふなら

歡樂の終りはこの通りと思ひなさい。
わたしはむしろそれを摘みとり捨てゝ
孤獨のおもひにふけりませう。

白耳義風物詩

——ロマンスサンパロールの中より——

ワルクール

煉瓦と瓦の建物、
おゝ、なつかしい
小さな隱れ家、
戀する二人のためには—
葎と葡萄と
木の葉と花と
おもしろい天幕で
氣まゝに酒をのむ—

明るい居酒屋
麥酒、喧囂、
煙草燻らすものには
なつかしい給仕女。

近所の停車場につゞく
愉快な大きな往還、
さて見知らぬ異國の人、
人のよい漂泊者の猶太人。

——千八百七十三年七月——

シャルルロア

黒い草のなかを
古いもの影がとほる、
もの思はしい風は
咽び泣きでもするやうに。

身にふれるものは何？
そよめき鳴る燕麥
過ぎゆく人の目を
きずつける荊棘。

家といふよりは
碎れた假小屋、
地平はいづこも
工場の煙りで眞赤！

さて聞くものは何？
停車場のもの音、
ひとは何處にと見張る
かのシャルルロア？

もの悲しい匂ひ！

それは何？
古代の琴のやうに
響くは何の音？

野蠻な景色！
おゝ、おまへの息吹き！
人間の勞苦の汗と
金屬の叫びと。

黑い草のなかを
古いもの影がとほる、
もの思はしい風は

咽び泣きでもするやうに。

ブルユッセル

一

綠と薔薇色とは
丘やスロオプから逃れる、
あらゆるものを明るくする
朝の光りのなかに。

さゝやかな谿間におちる金の光は
すべてを優しい紅色に染める、

ちゞこまつた倭(ひく)い灌木の林から
かるい鳥の歌がきこえる。

秋の氣が身に泌むやうな
悲しさがあふれる、
あらゆるわたしの嘆きは
もの倦い空氣を搖りて夢みる。

二

空の下(もと)に果(はて)なく
つゞいた並木徑(なみきみち)の

まこと清らかな蒼色(あをいろ)、
この並木の葉かげに
幸福なものがあらうか？

そこで幸福にくらした
人々はいふまでもない
ロアイエール・コラールの人々、
その城の方に行つてみれば
あの年老(とし)つたひとびとの
美しい生活が信じられる。

そのまつ白なお城の

片かはに日は落ちる、
またその傍の野をも……
あゝ！　わたしたち二人の
戀もまたかしこに
巣をつくるのかもしれない！

ジュンヌルナアールのカッフェにて
千八百七十二年八月

三

木馬

サンジールのほとりに

吾らきたりぬ、
わが足早なる
栗毛の駒よ、

（ヴイクトル・ユーゴー）

まはれよ、まはれよ、よい木馬、
まはれよ、百ぺん、さて千ぺん。
いつもぐるぐるまはつておいで、
まはれよ、まはれよ、竪笛の音に。

太つた兵隊と太つた酌婦、
室にゐるよにその背の上に！

今日はさてこそカンブルの森で
おまへの主人も二人づれ。

まはれよ、まはれよ、心の馬も
はしこい掏摸の眼のやうにまはれ、
勇んだピストンの動くがまゝに
まはれよ、二人競争で。

そこで二人が飽きるまで
よろこびもつれよ、曲馬のなかで。
頭は重くも、腹ではたのしく、
世間はつらくも、二人はたのしく。

まはれよ、まはれよ、その馬には
拍車をつける要もない、
跳ばさうとおもへばたゞまはれ、
秣草を食はす要もない。

されば急げよ、心の馬も、
もう日もかげり夜となる、
鳩と孔雀を一しよにさせよ、
市場にかくれて、女房にかくれて。

まはれよ、まはれよ、空はしづかに

金の星をば夜衣につゝむ、
こゝにいとしい二人のわかれ、
まはれよ、太鼓のたのしい音に。

マリーヌ

風はさはがしく看風機をたづねて
牧場のかたへと吹く、
護衛の人よりゐないお城は
壁は赤く、瓦は青く、
明るい野べのかたへとつゞく。

魔法使の樹のやうな
秦皮やおぼろげな木の葉が
サハラの砂漠のやうな
緑の廣野に一列に並んでゐる、
そして下には三葉や苜蓿や白い芝草がある。

汽車はこのおだやかな野原を
しづかにすゝんでゆく。
牝牛よ、ねむれ、やすめよ、
廣野のなかの優しい小牛、
おまへの眼には疲れが見える。

汽車はしづかに音なくすべる、
どの車にもたのしい居間がある、
ひくい聲でさゝやき交はし
のどかに外の自然をたのしむ、
フエネロンの詩のやうなこの自然を。

千八百七十八年八月

並行

ふざけものゝピエロ

修業いたしたピエロぢやござらぬ、
世間普通のピエロぢやござらぬ、
それは古今未聞のふざけたピエロ
ピエロ、ピエロ、ピエロ、子供のピエロ、
莢をとび出た胡桃のやうな、
あどけないピエロ、ピエロ、ピエロ。

五尺にみたない背丈と云へど
光つた眼玉に愛嬌たゝえて
よくおしやべりをいたします、
どこまで行つても意地惡なピエロ、
すてきな天才、
しかめツ面の大詩人。

世の歡樂のねむりの中に
傷きやぶれた赤い脣、
その口づけに蒼ざめて
ひきつり、長くなつた顏、

身の終りをばかんがへて
浮世すどせるこのピエロ。

されど身體は脂ぎり、
子供のやうな聲をする、
小がらであるが若ものゝ
血に充ちた身にいつもいつも
あかず甘さに憧れる
子供らしい氣のこのピエロ、

さあ、兄弟よ、ゆくがよい、
惡いたづらもいまのうち、

おまへの夢の路をゆき、
巴里を、さては世界のはてを、
その子供らしい心をもつて
けだかく、早く、ゆくがよい。

大きな、おまへの着ものをきて
この苦痛をもつと重ねろ、
おまへの元氣をもつと出せ、
ふざけた姿に圓光は光る、
しかみ面したこの顏こそは
氣安い吾らのサンボール。

詩劇

お互ひ同士（喜劇）

お互ひ同士

登場人物

ミルチル
シルバンドル
ロザランド
クロリス
メズタン
コリドン
アマント
牧人及び假面の人多勢

舞臺

ワトオの畫にある公園のなか、時は夏の午後、黄昏に近きころ。

男女の大勢一群をなしてゐる、その樣子はしどくだらしがない。その眞中にメズタンに扮した唱歌者マンドリンに合はして歌ふ。

第一場

戀のこゝろをよそにすりや
この世のことは子供だまし
神がゆるしたこの世の快樂
遊びたいだけ遊ぶがよい。

その道理さへわかつておれば
人の運勢はたやすいものよ、
おまへの方へとついてまはる
アルカヂアこそすぐ目の先！

さあ、行くがよい、林の中の饗宴へ、
綺麗な瞳をひからせながら、
さあ打つがよい、胴衣の下の
たのしく波うつ小さな胸を。……

コリドン

蟬の眞似して歌つた吾ら……

アマント

そして一緒に躍つたら?

一　同

（ミルチル、ロザランド、シルバンドル、クロリスを除く）

さあ、行かう、行かうよ!

（前の四人を除いて一同去る）

第二場

ミルチル、ロザランド、シルバンドル、クロリス

ロザランド（ミルチルに向つて）

休まうではないか、

クロリス

御勝手になさいまし

わたしは家の中で躍るのが大すき、

みんなと一緒に草原へ出かけない方が

けつきよくあなた方のためになりませう。

（シルバンドル彼女をしめつける）

默れ、この阿魔女め!

（シルバンドル、クロリス退場）

第三場

ミルチル、ロザランド

ロザランド

お話しなさいな

ミルチル

なにを話さう、おまへのきゝたいことは？

過ぎた昔か、それを話しだせばさぞ退屈するであらう、

それでは現在(いま)か、あゝ現在はかうしてお互ひにこゝに幸福でゐるではないか。

では未來か、そんなことは氣樂に考へてゐればよいことさ。

ロザランド

まあ過ぎた昔のことでも話して下さいな。

ミルチル

なぜ？

ロザランド

なぜと云ってそれはわたしの仇し心

氣のふさぐ昔のことを綺麗に染め上げる

お喋者(おべつかもの)の「思ひ出」に身をまかしておしまひなさい。

そして天國の中に昔の地獄を隱して終ふさ。

ミルチル

可愛いゝおまへがそんなに所望といふなら、その憶ひ出をひとつ話して見ようか。

過ぎた悲しい戀路さ、これが俺たちの魔ものよ、

無限の鬱悶、云ひやうもない倦怠、刺すやうな悔恨、

過ぎた昔の殘酷な悲哀(かなしみ)といふ悲哀(かなしみ)。

俺は言はうとおもふ、俺たちの最も美しい希望といふものはい

つも偽りなんだと、
二人の心は行きつくところまで行くが、
そしてお互に征服し合ふが、お終ひには
そのお禮として、償ひとしてくるものは
お互ひを惱ませ、苦しませ、嘲けるものだけだ。
自分の愚かな嫉妬は戀びとの嫉妬と絡み合ひ、
戀びとの疑念は自分の疑念のさもしい心と一緒になる、
あらゆる戀びとの反く心！　あらゆる男の反く心！
あゝ、それがみんな愛し、思ひをよせてきた過去なのだ。
白蟲を引いたやうに憶ひ出の陰鬱な壁の上につけた過去といふ
痕跡を俺はよむことが出來る。
二度とすまいとおもふはこの道、

今さら泣いても嘆いてもおつつかぬ、
俺はくりかへしおまへに言つておくよ、このことを、な、可愛
いゝおまへが所望といふゆゑ。

ロザランド

わたしはあなたを見上げた男だとおもつてゐるのがわかつて？
そんなにまで強い感激をしてゐるのを。

ミルチル（感激して）

ありがたうよ。

ロザランド

だけれどね、あなたはあんまりものごとを仰山に考へはしなく
つて？
すこしぐらゐの倦怠や、わづかな間の悲みがなんでせう、

あなたは小兒のやうな憤りつぼい心で悲しんでゐるのでせう。
わたしはね、自分の運命に對しても、愛の心をもつて感謝して
ゐてよ、
愛の心で、自分に不信なものをも愛し、
愚かなことをいふひとをも、またいつも私を賞めるひとをも共
に愛し、
そのやうにしてなほ『愛の國』に住んでゐます。
さうよ、あなたの眼がびつくりするときにも、
あなたの腕が人形のやうになすことなくぶら下つてるときにも。
わたしはちやんと保證してよ、その眼のうちにある惱みを。
胸のなかにある不平もみんなあなたがうち開くのだといふこと
を。

ミルチル（おだやかに）
しかしね、俺を惑はした戀の日は俺とおなじにおまへをも悲し
ませるのだよ、
ね、俺のいふことを信じなさい、眠つてゐる戀を醒ますがよい、
戀は冒險だ、おまへの夢がさめ切らないうちは尊くも思はれや
うが、
その果てはやつぱりひとりでに消えてしまふものさ。
ロザランド
馬鹿々々しい！　ぢや、なんで私たちは生きてゐられるの、戀
もなく愛もなくて？
ミルチル（しんみりと）
たゞ死ぬためにさ！

ロザランド

私はやつぱり生きてませうよ、それが一番大切なことだもの、
あなたの悲哀も憤激も嘲笑も私にはなんでもない、
そんなものはたゞ瞬間の暗い影にすぎないとおもひます、
この意地つぱりであなたの悲しいお話もなんとも思はぬし、
このしつツこい私の戀心をどこまでも通しませうよ、
そしてこの心であなたをおもひませう、あなた私のいふことを
きいてくれる？

ミルチル

おまへはしつツこいよ、

ロラザンド

フン、ぢや御勝手になさい！

ミルチル

あゝ、勝手にしようよ、

ロザランド

ね、冬のあとでふたゝび咲くつゝましい愛の「春」を摘みにおいで、
そんなくさ〳〵する考へをおやめなさい、
私のひろい立派な「愛」のなかに昨日のやうにお笑ひなさい
そして、いつまでもね、

ミルチル

あゝ、おまへはいつも俺をひきずツてゆく、不思議な奴だ！

（二人退場、シルバンドル、クロリス登場）

第四場

シルバンドル、クロリス

クロリス（駈け出して）

いやよ！

シルバンドル

いゝよ、

クロリス

あたしもうたくさんなの……

シルバンドル（頸に接吻しながら）

さあ、もう一度言つてごらん、あたしもうたくさん……て。

だがね、もうかうなつては曖昧な返事ぢや承知しないよ。

醜い嵩が可愛らしい燕を捕へたといふものさ。

クロリス

まあ、亂暴ぢやないの、人を恥かしがらせて！

ほんとにいやよ、人が笑つてよ（笑ひ乍ら空泣きする）

ア……オホ……ヒヒ……ほんとによくないことよ！

シルバンドル

何言つてるんだい、だがね、ほんとに人間らしい世界といふも

のはこの俺たちの間のことぢやないか、

お互に騒いで、愉快で、自由で、若くつて

なんでも俺たち以外の連中は蔑んで

丁度跛人の足のやうに二人の心を一つに合はせ、

二つの心を一人のものとしようではないか。

クロリス

まあ、このひとはうまいことを言ふわね、
まつたくあなたは詩人か辯士よ、わたしさう思つてよ、
可笑しくも思はず、一寸そんな察しのいゝことが言へるのだか
ら、

シルバンドル

おまへはまたおまへで可愛いゝお喋りで人をひやかすのが甘い
よ、
だがね、俺は自分の獲物をもう一度たしかめにきたのだ、
おまへの綺麗な目のなかにある光り、おまへの頭の中にある悧
巧な心！
さあ、色よい返事をしてくれないか。

クロリス

でもね、もしかあなたのことであたしがいやな、氣に入らない
ことを見つけたら
あなたが折角あたしをものにしてもなんにもならないでせう、
僞の勝利者、繪にかいた征服者……

シルバンドル

そんならおまへはたゞおまへの思ひどほりをどし〳〵やればい
いさ。
さうすればおまへの考へてるわたしについての厭なことは
結局無駄になることだらうよ。

クロリス

でもさう一口に駄目になるとも云へないことよ、それは人間の
愚かな心さ！

よしませう、よしませう、わたしの心をあなたが勝手に忖度し
　ようと思ふのはつまらないことよ。
ほんとにこんなことで爭論するのはお互につまらないわ、やめ
　ませう、
ね、あたしあなたに私の性質をお話ししますわ、
わたしがどんな女だかあなたにわかるやうに
そしてもしかあなたが煩悶してゐるならそのわけもわかるでせ
　う。
わかつてもらひたいわ。

シルバンドル

俺の望みがかなはぬといふことをかい？　俺の戀が……

クロリス

まあ、默つておきゝなさいよ、――ね、
あなたのお對手（おひて）になつてゐるこの女の子は氣輕（きがる）で婀娜（おだ）つぽいで
　せう、このあたしはね、……。
あたしは氣樂な日が好きでした。ふざけた夜が好きでした。
あたしはあたしの氣に合ふひとだけが好きでした。
あたしを嬉しがらせる戀びとが好きでした。
が、そのひとは結局あたしの戀の幸福を呪つてゐる人なんです
まあ、引き合ひに出せば恰度あなたよ、近頃は私からちつとも
　手出しをしないあなた、
私をまるで獸のやうに取り扱つたあなた、
さうでせう、あたし、この先きあなたがどんなに煩悶しようと
　知らないことよ、

シルバンドル（笑ひ乍ら）

こはいね……

クロリス

他人（ひと）がね「おつゝしみなさい」つて言ふわよ、だから、あたし慎んでゐるの。

シルバンドル（半ば眞面目で）

もうたくさんだよ、悲觀して泣きたくなつた、

クロリス（寄りそつて愉快に）

そこが大切なことよ、けれど……

シルバンドル

なか〳〵手酷しい洒落（しやれ）だね、

クロリス

まあ、お終ひまでおきゝなさいよ、わからずやね、このひとは……

が、ね、あたしはかう思ふのよ、たとへあたしたち二人（ふたり）が互に惚れ合つて、よし夫婦約束までしたとしても永久無限に在（お）はします莊嚴な嫉妬ぶかい神さま――パフオスの祭壇に祀られてゐる意地の惡い神さまは怨しますまい、

（シルバンドルの云はうとするのを遮り）

それは眞實――あたしたちの心で尊敬してゐる戀の神樣がさうなんですもの、

あたしたちはいつもあれかこれかとたち迷ひ、

おしまひにはいつも後悔するのです、まつたく

い〻加減の夫婦約束なぞはどつかへ行つて終ひます、
賭物を失くした人のやうにあとかたもない虚偽を追窮するだけ
です、
そこでどうします？　たとへがたない悲みを抱いて
腕をもがき、眼を瞳らし、頭の髪を亂して
山をこえ、谷をこえ、あのオルフオイスよろしくといふ形で
無益な悲愁につゝしみを忘れて
嘆息の息を吸ひ、涙の海におぼれて終ひませうか、
いや、いや、決してさうはしない、やつぱし危險を冒して
なんでも思ひを果さうとするでせう、
あたしたちはこゝにゐる、あなたの云ふとほり、お互に惚れ合
ひ、幸福で、

あたしたちの甘い樂しみを知らない連中を馬鹿にして
二人の心を一つに合はし、一つの心を二人にわかつ……と自分
で自分に戯れながら
あたしはまつたくあなたのものとなつたとき……あなたはそれ
で安心して？
あたしはほんとに永い間いたづらをしてきたのよ、
そして折角清い愛にさゝげる心を不滿に思つてゐたの、
それが今度はあなたのところへやつてきたの、すつかり戰に疲
れて。
お互に愛しませう、あたしの手をとつてあたしの胸へあてゝ下
さい、
しかし誓つて明日のことを夢みてくださるな、

その明日がたのしみにならない明日だつたらつまりませんもの、
私たちの幸福はまつたく砂の上に築かれてゐるのよ、
戀といふものほど正直でない奴はありませんね、
だから、あたしだちはお互にひらけた心でゐませうよ、
あなたはさうは思はなくつて？

シルバンドル

もし、さう出來ればと想ふが……

第五場

（前どほりの人物、ミルチル登場）

ミルチル（二人に近づき）

そりや、奥さんのいふとほりだ、奥さんの云ひ草は俺の歌ふ「もし」といふ歌ひ出しの戀歌のとほりだ。

クロリス

さうすると「もし」が二つになるわね、「もし」なんてことは一つでたくさんよ。

ミルチル（クロリスに向ひ）

だが奥さんもその「もし」黨だと俺は思ふがね、

クロリス（シルバンドルに向ひ）

それで、あなたもさう思ふの？

シルバンドル

道理には從ふよ……

クロリス（同前）

まあ、すつかり臆病になつちやつたのね、

ミルチル（クロリスに）
あなたの家臣が出來ましたよ、クロリス、私はあなたの家臣ですぜ。

第六場

（前どほり）（ロザランド登場）

ロザランド（走せより乍ら）
まあ、みなさん、あたしもお仲間に入つていゝでせう、
あたしたちがいたづらごとを始めてから
あなたの乘りものはもうずゐぶん變りましたね、
（ミルチルに向ひ）
あたしはあなたの申込みをみんなおかへししますよ、古いのも、

新しいのも。
それから、こないだの口說きも、眞實といふものもつまりは僞ですものね。

ミルチル（クロリスの腕によつかゝり）
おまへは可愛いゝよ、

ロザランド
おまへさんは自分を用心することはもう要りますまい、
シルバンドルにはあたしといふ親友がついてゐますからね。

シルバンドル（感激して後輕く）
可愛らしいシラのあとから出てくる優しいシャルブドといふ格だ！
だが大丈夫シャルブドの方が成功するだらう。

そして二人ともめつぽう婀娜つぽいときてゐる、
浮氣どころといふ奴は羽子板でたゝいてゐる中が樂しいもんだ。
だが、その突いてる羽根が飛んでつて終ふと困るのだ、

クロリス（シルバンドルに）

なんだ、ふざけもの！

ロザランド（シルバンドルに）

恩知らずね！

ミルチル（おなじく）

横着もの！

シルバンドル（ミルチルに向ひ）

「横着もの」つて言つたね、ところで君、
俺の煩悶といふものは俺だけのもんぢやない、お互ひだぜ、

おれたちがおまへを苦しめることもあると同時に、おまへが俺
を惱ませることもあるのだ

（ロザランドとクロリスに向つて）

ね、御夫人、わたしはお二人のところへゆくと全く奴隷ですよ、
しかし、危險な道中に綱を張りわたしてゐる私の心は
危いと知つたら逃げ出す用意はしてある意地の惡い馬のやうな
もんですね、
いざ、面倒となればどこへでも手綱を離れてゆきますよ。

（ロザランドに向ひ）

ね、ロザランド、もし夢のやうな樂しい國へゆきたいと思ふな
ら
須臾く自由な駿足に跨つてはどうだい、勝手に秣を喰ひちらかし、

ときには悍馬となることはあつても、俺は決して厭とは云はな
いよ、
一つ意氣熾んなこの馬にゆつくりと乘つてみてはどうだい？

ミルチル

その命令はすこし亂暴だよ、
がね、手を燒いた猫は水へ飛び込むのは恐いもんだよ、あんま
り冷いんでね、

（ロザランドに向ひ）

さうぢやないか、ロザランド、おまへはみんなよく知つてる筈
だ、
その猫のことをさ、ね、それは俺だよ。

ロザランド

あたし何にも知らないわよ。

ミルチル

みんなが知らないといふから事が面倒になる、
クロリスだつてあてのない夢を見ようと思ふ快樂のために
この俺をねらつてるにちがひないよ、
俺はすつかり用心してるんだ、もつと清淨な匂ひのいゝ優しい
花のあるところに居たつて
俺はおそかれ早かれ荊棘（とげ）につき當るのだから。

（クロリスに）

奥さん、さうぢやありますまいか？

クロリス

何にも云はずに私を可愛がつて下さいよ、

さよなら、シルバンドル！

ロザランド

さよなら、ミルチル！

ミルチル（ロザランドに）

お別れのつもりかい？

シルバンドル（クロリスに）

さうさ、永久に失敬だ、

ロザランド

さよなら、ミルチル！

クロリス

さよなら、シルバンドル！

（シルバンドル、ロザランド退場）

第七場

ミルチル、クロリス

クロリス

あなたは戀の轉賣をしようってんでせう

がみ〳〵いふ情婦（そんな）の首枷（くびかせ）から離れて

こん度はこの私の弱々しい姿の方へ廻つてきたんですね、

ミルチル

あなたは女が侮辱されたと思ふの？

クロリス

え、私が？

ミルチル

いゝえ、あの女がですよ。

クロリス

あゝ、――わたしは別な意味からさう思つてゐました、白狀しますわ、そして少しとんがらがつてきたいきさつのことで考へ込んでゐたんです。

けれどもあなたがロザランドに何か話さうとしたのは事實ですわね、そしてあの女の嫌がることを言つてあのひとをすつかり苛々させて終つたんです、御心配には及びませんよ、あのひとはすつかり悲觀してるんですから。

ミルチル

あなたはそれを確かめてゐるの？

クロリス

えゝ、さうですとも、つい近頃惚れ合つてきた情婦といふものはね

いつも我慢の出來ないほど燃えてゐるんですよ、そして きつと成功をするはずの良い機會がありながら、悲慘な競爭者のなかに交つてゐるんですね、あなたはあたしたちの初戀時代の一番はじめにやつたやり方を應用しようとは思はないの？

ね、親愛なテシウスさん、あなたは捨てたアリアドネのために何んといふ屈托をしてゐるんです？

――が、そのことはもうよしませう、もう云ひますまい――
たゞね、ロザランドは今でも不人情なあなたに大熱々だといふ
ことは
あたし、きつぱり申しますわ、地團太を踏んだり、ぷつ〳〵云
つたり、苛々したりする
あのひとの遺恨は恰度うちのシルバンドルが私のことを怒つて
ゐるのと同じですわ、

ミルチル

あなたはシルバンドルをそんなに可愛さうだと思つてるの？

クロリス

あれつきりさ、があなたの舊友だとおもへば……私どう思つた
らいゝんでせう、

ミルチル

そりやまた、なぜ？

クロリス

なぜつて……なあになんでもないことよ。
あたしそれをあなたに向つて言ふんぢやありませんわ。

ミルチル

けれどもあなたはシルバンドルを非常に可愛さうだとおもつて
ゐるの？

クロリス

あなたあたしに惚れてる？

ミルチル

あなたの眼ば素敵だし、あなたの……

クロリス

あなた、シルバンドルのことを妬いてる？

ミルチル（男らしく）

さう！　（しづかに）しかし、それはもう過去ですよ、奥さん、

クロリス

すこし晩播だけれどあなたの申入れは立派ですよ、

あたしあなたのいふことは承認しますわ、

があなたほんとにあたしに惚れてゐる？

ミルチル（靜に思入つてのち嬉しげに）

惚れてますとも、ほんとに。

クロリス

まあ、ずゐぶん冷淡な惚れ方ね、しかしどこへ行つてもあなた

私をおもつてくれる？

ミルチル（前と同じ態度で）

さう、なつかしの友達さ！

クロリス

「なつかしの友達！」なんといふ冷淡な言ひ方でせう、それがあなたの平凡な祝詞で且つ勝利者の態度なの！

私はやがて胸の上にあなたの承知の手を暫らくもつことでせうよ。

ミルチル（不性無精に）

御免なさい……

クロリス

でもロザランドとシルバンドルはまだあそこにちやんとゐるこ

とよ、

ミルチル（驚いた樣子）

ロザランド……

クロリス

とシルバンドル、どういふわけでまああの二人は
あなたの腕に遮られて水車のやうに追ひ廻し合つてるんでせう
ね、
あのひとたちは追つかけこをしてるんだ。さあ、早く浮氣ごと
をすまして
あのひとたちに明け渡してやりませう、ね、もうこんなお互の
喧嘩はよして終ひませうよ。

（二人退場）

第八場

シルバンドル、ロザランド

シルバンドル

おれの生涯は將來のことを氣にしてばかしゐるんだね。

ロザランド

それはさうよ、丁度ミルチルのやつてきた反對をやつてゐるの
ね、
あなたはこれからやつて來やうといふ戀を怖れて
いつも未知な接吻をする脣を非常な不安と細心な氣もちで心配
してるんでせう。
ところで、あのひとは昔手負つた戀の古傷をおもひ出してばか

りゐるんです。
恩知らずと同様な無智よ、過去ばかし氣にしてゐるんですもの、
そりや二つともよくないことよ、シルバンドル、あなたはもう
お止めなさいよ、

シルバンドル

斷じて……

ロザランド

お止めなさい、その二つとも、あなたは逃げちゃいけないこと
よ、
氣に病むのはどつちにしても苦勞が增えるばつかり、止した方
がいゝわよ、

シルバンドル

けれど、どの點から云つても俺のやつてきたことはそんな惡い
こつたあ思はないぜ、
俺はおれの罪業に對しても一切無關心だ。

（愛嬌を作つて）

尠くともあなたの心に對しては！

ロザランド

あなた笑ふからいけないことよ。

シルバンドル

俺は笑つてはしないよ、俺はたゞ或る一つの事に關して愼重に
言つてるんだよ、
俺は別にあの婬奔な愛くるしいクロリスと惡いことを共謀した
とは思はないよ、

けれどもその保證としてね、今度はおまへと一緒に幸福な生涯
をはじめようと思ふんだ。
情婦には馬鹿にせられ、その上貶きざりにされて
めちやくちやな目に合つた俺をおまへはよく救つてくれたよ、
俺の十の指のなかにこの熱烈な武裝をしておきさへすれば
俺はどんなになつたつておまへを人にとらせはしないよ、
ほんたうとも、俺はきつとおまへを可愛がる、惚れぬく（そり
や一面俺の義務さ）滅茶苦茶に可愛がるよ……
さあ、泣き面はおやめだ、くさ〳〵した心配はもう無用だ！
俺はおまへの忠實な犬になるよ、優しく可愛い狼にね……

ロザランド

あなたまた笑つてるぢやないの、いけないわよ。

シルバンドル

また笑ふ……いや、俺は決して笑はない、
俺はおまへを崇拜してるんだ、その優しい朗らかな聲に
すつかり惚れてるんだ、また手のなかに入りさうな位小さい
その足も好きなんだ、
路を歩くときには小さな可愛い音をたてて
上靴の房紐の下に白い夢のやうに輝いてゐるではないか。
またおまへの張のある眼はあの下界へさしてくるなつかしい光

リの

お星さまとその輝きを競ふばかり
たとへてみれば夏の花が
そのゆかしい花冠を太陽の方へとふりむけたやうなものだ、

あゝ俺は恍惚として不言不語だ、
無念、無想、靈魂宙に迷つて氣を失ふとも云へやうさ、
その優しい眼つきと、その氣品のある顏の前ではね、
俺は風になびく草のやうに堪らないおまへの呼吸を感じてゐる
んだ。
おゝわが最愛の人、わが神、わが絶對至上のもの、
俺の心はおまへの金の睫毛の蝋に息づいてゐる……
――そこでだが、おまへはあのクロリスがまだ俺を思つてゐる
とお考へかい？

ロザランド

もし、さう考へてるとしたら？

シルバンドル

馬鹿々々しい考へさ！

ロザランド

しかし懸引のないところを申しませうか？

シルバンドル

いや、もう結構だよ、一體俺をどうしようてんだ、俺は馬鹿な
んだよ、俺は煩悶してるんだ、
俺はおまへにぞつこん參つてゐるんだ。

ロザランド

でもね、眞正眞銘の事實はね、
クロリスがあなたに惚れてるといふことですよ……

シルバンドル

よわつたね、しかしそれが事實としたら、彼女め！　彼女め！

やつてくるがいゝ！　あゝ！（幾分心配な様子）

ロザランド

どうして、あなたはあのひとを疑つてるの？

シルバンドル

このうつろい易い心は仕方がないさ、
彼女は今ミルチルを口説いてるんだ。

ロザランド（感情的に）

彼女がミルチルを口説いてるつていふの？　いゝえ、ミルチル
があのひとに惚れてるのよ、……

シルバンドル

嫉妬の神髄がわかつた日には俺は死んでしまふよ！

ロザランド

まあ、默つておゐでなさいよ、

シルバンドル

虚言者め、馬鹿野郎！

ロザランド

あなたはミルチルのことを妬いてゐるの？　え、お言ひなさい
よ、

シルバンドル（俄かに悲觀した態度で）

妬いてるとも！　いやなことだがね、しかしほんとだから仕方
ないよ、俺は實際煩悶してるんだ。……

ロザランド（心窃かに嬉しげに）

でせう……私にはちやんとわかつてゐますもの、あなたの嫉妬
者だつてことは！

シルバンドル（一寸側をはなれて）

まあ、さう見せかけておくさ、

だがね、俺はさうすることが無用ぢやないってことをはつきり

言つておくよ、

俺がもしほんとに何んにでも嫉妬をやいてるといふのならね、

それは今迄のミルチルが祟つてるんだよ。

ロザランド

冗言はおよしなさい、私はほんとに悲しんでゐるのよ、そして

あなたもでせう、

私の追ひまはしてる標的はね、ほかでもないあなたですもの…

……

二人とも煩悶してゐるんならその悲しみを話し合はうぢやあり

ませんか。

私たちの不幸といふものはね、人に言はせればごく普通なもの

かも知れませんよ、

まるで氣安めのやうにも見えるでせう、

私たちはいつも戀をしどうしだつたんですもの。

あなたはクロリスと、私はミルチルと、どう考へたつてもとど

ほりになりつこはない二人づれ、

たゞその間にも違ふのは私は人に裏切られたのだし、

またあなたの場合は御勝手にあなた自身が煩悶の種を播いたと

いふだけ、

だからあなたの煩悶は當然の罰あたりといふもんですわ、

さうぢやなくつて？

シルバンドル

はゝゝ、おまへは俺の心中をうまく言ひあてゝくれたよ、あゝクロリス、俺はおまへを惡くばかしおもつてゐたよ、おまへの暴君にはもう二度となれまいね、おまへ善良な快活、優しさ、あゝおまへの心は？

ロザランド

私はまた特別の嘲笑者の運命といふ奴にあつてミルチルの不人情を泣いてゐるのです。

シルバンドル

不人情の！……

しかしそれは幸ひクロリスが彼奴に惚れる條件になるよ、クロリスはもう駄目だ！

口惜しい、悲しい！　おまへはがやてあの女がまた俺に惚れるだらうなんて言つたね、、

おゝ、さう云へば向うをごらん、二人づれでやつて來たぢやないか。

ロザランド

ほんとに……まあ、あのひとたちは何を話すんでせう？

（クロリス・ミルチル登場）

第九場

ロザランド、シルバンドル、クロリス、ミルチル

クロリス

さあ、まだどうとも考へ直すことが出來てよ、

憂鬱な王様、ね、全くあなたの立場を御自身で考へてごらんな
さい、
默りこんで陰氣くさくしてゐることはほんとぢやないでせう？
あなたが氣を腐らして悲しい戀歌の節に合はさなければならな
いと考へるやうな
そんな平凡な常套な戀はほんとぢやないでせう、
私にはまるでつまりませんよ、窮屈な胴衣を着てゐるやうでね、
あなたは一種の禮讓から、抑制から、あなたの祕密を
私に打ち明けもせずにたゞあの女のためにあなたの胸を曜ら
してゐたのでせう、
けれどもね、今はもう妾の方でちやんと謎がとけて了つてゝ、
だのにあなたはなぜまだ祕密を打ち明けないでゐるの？

彼女のことをおきかせなさいよ、さうすればすぐ眞實になるこ
とよ、
さうしてあなたも氣安になることよ、
あなたがもし他人の煩悶をきく氣があるなら、
私だつてあの男のことをあなたに打ち明けてあげるわ。

ミルチル

え、なんだつて、あなたも、あなたも！

クロリス

私自身、えーえ、私自身、
だが私に惚れてた情人のことをまだ私が思つてゐられると思
ふ？
私たちはいつも二人でした、シルバンドルも

互に愛し愛されてゐたのを、何といふことでせう、嫉妬の神が
……
なんといふ惡魔が私たちを別れさせるやうに殘酷な誤解をふり
撒いたのでせう、
あゝ、あのひとは亂暴だつたといふよりたゞ氣儘だつたんです、
その心があの人の感情を誤らせたのです。

ミルチル

あの男を思つておやりなさいよ、ひよつとするとあの男ももう
今ごろ後悔してゐるかしれませんよ、
私がいま後悔して涙を出してることから考へてもね、……

（すゝりなく）

（シルバンドルとクロリス手をつツつく）

ロザランド

意味深長な涙！　なつかしい優しい瞬間！

ミルチル

怖しいこつた！

クロリス

悲しいことだわ

ロザランド（瓜立つて近くより聲低く）

クロリス！

クロリス

あなたそこにゐたの？

ロザランド

喧嘩して別れた氣まぐれな浮氣はもうやめたのよ、

人情のない怒りぽい心はもう止めませうよ、
シルバンドルは幸福になつたことよ、だから私はあなたとさう
させたいの、
もう今迄のことは二度と繰り返へさないといふ固い約束をしよ
うぢやありませんか、
もう、それは遲いこと？

シルバンドル（クロリスに）

いゝえ！　あゝあ、今までのことはもうすつかり眞平だ！
これからは少しづゝ思ひやりをお互ひにしようよ、
最も立派な復讐といふものはね、どこか寛大をもつてゐるもの
だよ、
あんまり俺をとがめてくれるな、そして俺がおまへの氣に入る

だけのものでないと言つて
おれをやり込めやうとするな、俺を惡く思つちやいけない、——
だが俺の頭は調子が狂つてるんだ、おれの心は弱々しくつてぐ
にゃ〳〵なんだ。（膝を折る）

クロリス

あなた氣でも違つたの？
お立ちなさいよ、私はね、どうして今まで不愉快な運命の下に
ゐたかと言ひたい位
今はそれは〳〵幸福なのよ、
私の腕を長春籐のやうに戀しいあなたの首に捲きつけませう、
私たちは最後に實證するでせう（私の最初の喧嘩と最初の親密
が）

私の最初の愛をうけたあなたに
疑ひの雲を起さすやうになつたのだといふことを、
もし早合點と我が儘とが互ひにくるものなら、そしてよくある
ことなら
その馬鹿げた出來ごとのなかにはどこか眞劍な所がいつもある
はずよ）
疑の雲を拂ひませう、そして互ひの心を躍らした
あのなつかしい醉ひどゝちをもう一度胸に味ひませう。
（ロザランドに）
あなたもね、しつかりして下さいよ、奥さん、
あたしの心おきない親愛のしるしをうけて下さい、――そして
あなたの妹に接吻を。

（クロリス、ロザランド相抱く）
シルバンドル
なんといふ優しい歡喜だ！
ロザランド（ミルチルに）
ね、ミルチル、あたしあの女のやうにしたら、あなた何んてい
ふ？
ミルチル
あゝ！　あの女は救はれた、美しい寛大な恕しだ！
（ロザランドに）
さあ、私にもおまへの手に誠心をもつて接吻さしておくれ！
ロザランド
まあいゝ大團圓が來たのね、

こんななつかしい時は實際ないことよ、
悲しいことなんかもう決してお話しなさるな、
幸福でおゐでなさい

（クロリスに）

あなたの青春をお樂しみなさい、甘い友情と
いまのあなたのやうな歡しさを、
太陽のやうに輝いたあなたの接吻の眞紅な花をお摘みなさい！

（ミルチルの方へ向き直り）

あたしたちは色々と苦情ばかし言つてきた昔の戀人同士だけど
もう今は嫉妬なんかやかずに尊敬しあひませうよ、
まつ白晝のやうな眞面目な幸福をもちませうよ。

（第一場と同じ群衆舞臺にあつまる）

どらんなさい、爽やかな太陽の光線を、私たちの友だちはみん
なとゝへ還つてきて躍つてゐます、
まるで私たちの美しい友情を受けるかのやうに。

第十場

（すべての人物登場）

メズタン（マンドリンに合はせ歌ふ）

行け、何のなやみもなく、
きみが歡喜をのみ手にたづさへ
絹の裳裾をそよがせて
ふたゝび歌にきゝ入れよ。

心狂へるものこそつねに
いとも聖きならひのこの世に
こよなき一つの教訓こそは
いつも時をば忘るゝことなり。

そはこの世の憂さもつらさも
何らかゝはるすべもなし、
げに人の世はたゞ悲しみと
ありのままなる事のみならずや。

——（幕）——

大正八年九月十五日印刷
大正八年九月二十日發行

（定價金八拾五錢）

《エルレーヌ詩集》

飜譯者　川路柳虹

發行者　東京市牛込區矢來町三番地中の丸　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話番町（八〇九番）（八九九番）

振替（東京）一七四二番

印刷所　東京市神田區宮本町五番地　電話下谷、四〇六七番　新潮社印刷部
印刷者　高橋治一

317
178

泰西名詩選集

小形背洋布特製最美本
紙數一册約三百八十頁
一册八十五錢送料六錢

第一編□ハイネ詩集　生田春月氏譯
第二編□ホイットマン詩集　白鳥省吾氏譯
第三編□ゲエテ詩集　生田春月氏譯
第四編□ゼルレエヌ詩集　川路柳虹氏譯
第五編□バイロン詩集　佐藤春夫氏譯
第六編□カアペンタア詩集　富田碎花氏譯

◀第四編まで既刊　◀以下近刊▶

千家元麿氏著（新刊）

定價　壹圓拾錢
郵送料　八錢

詩集 虹

日本の詩壇はむしろ議論が多すぎる。よし議論で千家の詩をつまらないと云ひ切れる人があつても、千家の詩は生きてそして讀者の心にひゞき、そして深き愛をよびさます事實を否定することは出來ない。自分は眞價の前には頭をさげる。議論の前には頭はさげない。千家の詩は少くも今の日本で最も人間の心にひゞく詩だ。そして千家は今の日本に於て最も有望な詩人だ。自分はかう安心して云ひ切る。（武者小路實篤氏）

自序の中より

愛する人々よ、この詩集を讀んでくれ
この詩集の眞價は露骨に諸君の眼にふれて輝くだらう
諸君の心をこの詩集に見出して呉れゝば幸だ
諸君の心に少しでも生氣を傳へる事が出來たら
自分は詩集を出す甲斐があつた事を感謝する事が出來る
自分の愛する詩集よ、良き讀者を見出して呉れ
自分の愛する人々よ今生れ出た此詩集を見出して呉れ

Alfred de Musset

日本に初めて出でたる一大詩集

富田碎花　川路柳虹　室生犀生
福士幸次郎　山宮允　佐藤惣之助　北原白秋氏編

日本詩集

一九一九年版

▼大版三百四十頁
▼定價壹圓參拾錢
▼郵送料八錢

現下詩壇に名を列する四十有餘氏のその最も自信ある作物を集め、更に之を七名家の嚴選を經て一卷となせるもの。泰西詩壇に倣ひ、毎年一回刊行の計畫の下に、玆に先づ一千九百十九年版は公にせられたる也。是れ實に最近詩壇の鳥瞰圖にして、また最近詩壇の最高水準を示す一大集也。

新作歌集

■幻の華

伊藤白蓮著

（第七版）

華麗極美本
價壹圓五拾錢
郵送料八錢

ド・ミュッセ著
相馬御風氏
野尻抱影氏　共譯

■戀より戀へ

極美本
洋布製

▼紙數二百五十頁
▼定價八十五錢
▼郵送料八錢

ミュッセは佛蘭西近代の浪漫主義系に屬する天才詩人にして、大音樂家ショオパンと共に彼の才色絶倫の閨秀作家ジョルジサンドを戀ひその激しき思に身をやぶれる人。本篇は彼が生涯の悲しき戀、はかなき戀の數々を描ける、僞らざる告白にして、小說以上に感味深き物語は、之を讀む若き人々の心肉を溺らさずんば止まざるの魅力を有つ。

ダンヌンツイオ ■死の勝利　生田長江譯　定價一圓卅錢　送料八錢

モオパスサン ■女の一生　廣津和郎譯　定價金一圓　送料八錢

ドオデエ ■サフオ　武林夢想庵譯　定價金一圓　送料八錢

■ツルゲエネフ全集

總洋布箱入
特製極美本

(1) ■獵人日記　生田長江氏譯　▼定價五拾錢▼送料八錢

(2) ■ルーヂン　田中純氏譯　▼定價壹圓▼送料八錢

(3) ■初戀　生田春月氏譯　▼定價八拾錢▼送料八錢

(4) ■その前夜　田中純氏譯　▼定價壹圓▼送料八錢

(5) ■煙　大貫晶川氏譯　▼定價壹圓▼送料八錢

(6) ■父と子　谷崎精二氏譯　▼價壹圓廿錢▼送料八錢

ヱルテル叢書

(1) 若きヱルテルの悲み　ギヨオテ作　秦豐吉氏譯

(2) 海の嘆き（名原）　ボオルとギルジニイ　サンピエル作　生田春月氏譯

(3) 戀と死（名原）　トリスタンとイゾルデ　ベヂエ作　後藤末雄氏譯

(4) 薄倖の少女（附錄）　馬車を待つ間　ツルゲエネフ作　衞藤利夫氏譯

(5) 少女の誓　アタラとルネ　シヤトウブリアン作　生田春月氏譯

(6) 森の處女（附錄）　ジイノオブゾルバケイ　ビヨルンソン作　三上於菟吉氏譯

(7) ヘルマンとドロテア　ギヨオテ作　久保正夫氏譯

(8) カルメン（附錄）　ゼニスの花嫁　メリメ作　布施延雄氏譯

(9) マノンレスコオ　ラベ・プレヴオ作　廣津和郎氏譯

特製極美本□一冊價七十七錢□送料六錢

■詩集 感傷の春

生田春月氏著
（四版）價六拾五錢 郵送料六錢

■詩集 靈魂の秋

生田春月氏著
（六版）定價六拾錢 郵送料六錢

『感傷の春』は傷み易き青春のおもひを盡くして、熱き戀、果敢なきあこがれを歌ひ、『靈魂の秋』は心の秋を歌ひて、青ざめし魂のあへぎを彈ず。共に長曲短曲二百有餘篇を集めて、青年詩人生田春月の全詩集をなすもの也。

■新らしき詩の作り方

生田春月氏著
（三版）價六拾五錢 郵送料六錢

二十餘の題目に分ちて、新らしき詩の作り方を說く。初學入門の士の爲めに成せるものなれば、平易と懇切とを盡くせるは云ふ迄もなし。始めて詩に志す人、已に詩の門に入りて研究しつゝある人に之を薦む。

388
106

落